

# オーストラリア夏季研修プログラム実践報告

中臺昇一・本弓康之・Regina Ver-Santos・建元喜寿

新たな本校の取り組みとして、オーストラリア夏季研修プログラムを実施した。この取り組みでは、本校SGHの問題意識やWWL拠点校としての本校の取り組みを意識しながら、生徒のグローバル社会に対するより深い見識の広がりを目指すことを目的として実施した。特に、このプログラムでは生徒の主体性を意識し現地でのフィールドワークや交流・体験を行うとともに、ICTを利用したふりかえりや異学年交流による校外学習の可能性を探るため異学年の希望者を対象とするなどの特徴を持たせた。

キーワード 校外学習 異学年交流 ICT

## 7. はじめに

令和元年度より本校はWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業の拠点校<sup>1)</sup>として、「国際フィールドワークを通じて持続可能な国際社会を創る人材育成システムの構築」を掲げ取り組んでいる。この研究開発構想は、これまで本校が取り組んできたスーパーグローバルハイスクール（SGH）の取り組み<sup>2)</sup>をさらに発展させる取り組みである。これまでの本校のSGHでは、自己と世界のつながりに関する認識不足や外国語を運用することへの苦手意識・外国語学習に対する動機づけの低さ、実践的な国際現場での経験不足等の改善を目標とし、「グローバルライフ」等の科目開発、各教科・課題研究と連動させた英語教育の実践、「高校生国際ESDシンポジウム」の開催等の様々な取り組みを実施してきた。

このオーストラリア夏季研修プログラムの取り組みは、本校SGHの問題意識やWWL拠点校としての取り組みを意識しながら、生徒のグローバル社会に対するより深い見識の広がりを目指す様々な本校の取り組みの1つとして実施した。特に、このプログラムでは生徒の主体性を意識した現地でのフィールドワークや交流・体験を行うとともに、ICTを利用したふりかえりや異学年交流による校外学習の可能性を探るため異学年の希望者を対象とするなどの特徴を持たせた。

## 8. 事前準備

このプログラムの募集は、5月初旬に生徒へ提示し、5月14日に説明会を実施、6月初旬には参加生徒を確定させるなど、短期間で参加する生徒を募集した。このプログラムの募集では、特にこのプログラムが各個人の目的意識を持った校外学習であること、また、各個人の費用負担で実施することなどを説明した。

これらの経緯をふまえ、生徒18名（3年生5名、2年生8名、1年生5名）、引率教員3名が参加し、このプログラムを実施することとなった。

以下に、プログラム実施までの事前指導日程（表1）を示す。

6月12日(水)	オリエンテーションⅠ 概要説明
6月19日(水)	事前学習① オーストラリア事前学習
7月3日(水)	事前学習② 日本人学校との交流準備 (語学研修)
7月9日(水)	事前学習③ 日本人学校との交流準備 (語学研修)
7月22日(月)	事前学習④ メルボルン大学の学生との ディスカッション準備
7月23日(火)	事前学習⑤ メルボルン大学の学生との ディスカッション準備
7月24日(水)	事前学習⑥ メルボルン大学の学生との ディスカッション準備
8月13日(水)	オリエンテーションⅡ 最終確認

表1 事前指導日程

事前指導では、放課後や夏季休業前の期間を使い、生徒

の主体性を意識させるために、自分の考えを自分の言葉で表現することを重視し、事前学習を行った。また、異なる学年の生徒が参加することを生かし、異学年協働によるグループ活動のための準備も行った。

## 9. 実施日程

以下に、本プログラムで実施した実施日程（表2）を示す。

8月18日（日）	成田空港発
8月19日（月）	シドニー着 市内観光 シドニー大学訪問 (大学生との交流)
8月20日（火）	シドニー日本人国際学校訪問 シドニー発 (空路) メルボルン着
8月21日（水）	メルボルン市内ウォークラリー 自由散策
8月22日（木）	メルボルン大学訪問 大学生とのディスカッション 自由散策 ミュージカル鑑賞
8月23日（金）	自由散策 フィリップ島ワークショップ ペンギン観察
8月24日（土）	職場体験 自由散策 メルボルン発
8月25日（日）	成田空港着

表2 主なプログラムの日程

実施したプログラム日程は、航空機による長時間の移動や生徒の緊張感も考慮し、プログラム前半では全体活動やグループ活動を中心に行い、プログラム後半にかけて徐々にメルボルン市内において各個人の主体的な活動が行えるように計画し実施した。

このプログラムでは、ノートパソコンやスマートフォンなどを使用し、毎日のふりかえりをベネッセのClassiを活用しポートフォリオとして記録することを生徒に求めた。

## 10. 生徒の記録

ポートフォリオでは、各活動をふりかえるとともに、活

動全体をふりかえって感想や思いを記録させた。以下は事前学習でのふりかえり、メルボルン大学での大学生とのディスカッションを行った直後のふりかえり、帰国直後のふりかえり等、生徒のポートフォリオの一部を引用する。これらの引用は、一部の生徒の感想ではあるがこのプログラムを通して生徒自身の変化を特徴的に反映していると判断できる。

### 【事前学習でのふりかえり】

（生徒1）自分の英語に自信がないため、つい小声になってしまった。小声になっているほうが伝わらないというのは分かっているのだが、なかなかうまくいかない。オーストラリアでもこの調子では、ただの観光旅行になり、得るものが少なくなってしまうと思う。英語力というより、気持ちの壁が大きいのだと思う。

（生徒2）ただ相槌を打つことしかできなくてとても悔しかったです、内容を理解することに集中してしまい話すことが出来ませんでした。落ち着いて話を聞き冷静に受け答えが出来るようにならないといけないと感じました。

### 【大学生とのディスカッション】

（生徒3）オーストラリアに行く前にグループで考えた疑問などをしっかりぶつけることができましたと思います。私は英語が苦手であり積極的に参加が出来なかったり、メルボルン大学の学生の話の中で所々理解できなかったりしたことがありました。英語や海外には興味があるので、英語が出来ないことがすごく情けなく感じたし悔しいとも思いました。今回のディスカッションだけでなく、英語がわかる事で出来ることの幅が広がると思うのもっと本気になって英語の勉強をしたいと思います。

（生徒4）4割ほどしか理解できませんでした。残りの6割は単語がわからなかったり、知っている単語でもパッと意味を理解出来なかったり、一言を理解しているうちにどんどん話が進むので自分の中で会話が追いつきませんでした。また、自分の考えがあっても英語に訳せず、1番英語が出来なくて迷惑もかけたと思います。頭の中真っ白になりました。最近筑坂スタイルで話をできるようにはなっただけ、それが英語で話せるかと言われればそれはできませんでした。正直悔しい部分もめちゃくちゃあります。私は普段からおしゃべりなのでもっと会話がしたいです。国内だけでなく海外でも会話ができるようになりたいと思いました。

（生徒5）ディベートは、キャンパスツアーを終えた後ということもあり、話しやすい雰囲気ですスタートできた。事

前に質問を原稿にまとめておいたことで、質問も円滑に行うことができた。学生の方にも質問を理解してもらうことができた。質問に対する回答は聞き取ることはできたが全て聞き取り相手の話す内容の全てを理解することにつなげることができなかった。わからない言葉が聞こえたときにその言葉を理解しようとしてしまうことで、次に話されることが聞き取れなくなってしまったのだと振り返る。このときに、一度きりのいいところまで話を聞いた上でわからないことについて考えたり調べたりして新たな質問につなげられたらよかったのではないかと考える。その後の「まとめ」のところでは、話したいことをまとめることができていなかった。タイムマネジメントをきちんと行えていなかったことが要因なのではと考える。また、言いたいことがすぐに言語化できないということを考え、スクリプトもしくはメモを作り説明できるような時間が必要だったと感じる。

#### 【帰国直後のふりかえり】

(生徒6) 私にとっては初めての英語圏での生活で、一週間弱とはいえ英語を使う機会に恵まれた。ミュージカルやウォークラリー、ペンギンパレードなどの特別な体験をすることができ、英語力の向上だけでなく人間として成長することが出来るような内容だったと感じる。また、シドニー大学、メルボルン大学といったトップ校の見学と学生との交流を通じて将来のビジョンを持つことが出来るようになった。自分から動くことができれば充実した内容にすることが出来るんだということを感じた一週間だった。

(生徒7) 半年前にカナダへ行きましたが、周りにクラスメイトがたくさんいるというのもあり良い経験にはなったものの積極的に英語を話す機会がありませんでした。今回少人数での渡航ということもありひとりひとりの会話が多いと考えたため参加を決意しました。実際海外へ行ってみるとやはり英語は最低限必要なもので、自分の英語力の無さをとても実感しました。筑坂に入学してから得た会話力や知識を共有したくても語彙力もないのであまり上手く話すことができず、歯がゆい気持ちから悔しい気持ちにもなりました。将来留学したい気持ちもあるので、今後後悔しないよう日本にいる間英語をしっかりと勉強しようと思いました。

(生徒8) 語学に関しては、英語が話せなくても話そうとする気持ちが大切なのだと思います。私は、英語を流暢に話すことが得意でない。しかし、話そうと努力すると相手も私が伝えたいことを汲み取ってくれた。話せなくても物事

を伝える姿勢が大切なのだと思います。この姿勢は、これから英語と向き合い上達させていくために必要なことだと感じる。また、約1週間のオーストラリア滞りで英語を話せると自分自身の視野が広がると改めて感じた。もっと上手く話すことができるようになれば、海外で仕事をするへの1歩にでき、日本以外での活躍の場が見えてくるのだと感じた。実際に日本人ガイドの方の日本と違う環境の中で観光という職で活躍している姿は、私に海外で働くことへの魅力を感じさせたように思う。特にオーストラリアやカナダは多様な人が暮らす国であり、様々なバックグラウンドを持った人と交流できる。そのような国で働くことはとても面白いことであると同時に私の人生を豊かにするのではないかと考えた。語学という側面からは、英語を学ぶ意味は何か考え直す機会となった。多様性という点においては、オーストラリアには様々な人が暮らしているということを知ることができたとともに、2年次で訪れたカナダと比較しながら気づきを得ることができた。シドニー大学の学生と話した際には、両親が日本や中国などオーストラリアにルーツを持たない人でも周りからは同じオーストラリア人として扱われる文化は日本と異なる考え方であると感じた。街中を散策した際や職場体験では、日本よりもオープンな心を持った人々が多くいるのだと感じた。困っていたら話しかけてくれる人、初めて会ったにもかかわらず気さくに話しかけてくれる人、写真撮影をお願いすると喜んで撮ってくれる人など温かい人にたくさん出会った。日本はシャイである人が多いため、こうした場面では積極的に関わろうとする人が少ない。これは大きな違いであると感じた。

(生徒9) 出発前の私の旅の目的は英語を上達させたいこの一つにしか過ぎなかった。しかし、行ってみると、とっさに英語が話せるようになるわけでもなくいつもよりパニックになって喋れなかった自分にびっくりした。しかし、市内のウォークラリーや大学生とのディスカッションを通して綺麗に英語を話すのではなくいかにアウトプットすることが大切なのかということがわかった。また、市内散策を一人でしてみるとお店で質問して見たり、話しかけてみたり自力で何かするということができた。生きた英語を感じることで観光するだけでなくオーストラリアの雰囲気や特徴を自身で体感することができた。それは普段座って勉強していても感じられることではない。これも私がオーストラリアに行った意味ではないかと思った。

#### 11. おわりに

本年度のオーストラリア夏季研修プログラムの取り組

みは、本校 SGH で設定した問題意識や WWL 拠点校としての取り組みを意識しながら、生徒のグローバル社会に対するより深い見識の広がり期待する様々な本校の取り組みの1つとして企画、実施した。特に、このプログラムでは生徒の主体性を意識した現地でのフィールドワークや交流・体験を行い、ICT を利用したふりかえりや異学年の希望者を対象とするなどの特徴を持たせた。

このプログラムの効果について生徒のポートフォリオより判断すると、本校の SGH で改善目標としていた、自己と世界のつながりに関する認識の向上、外国語を運用することへの苦手意識の転換、外国語学習に対する動機づけについて、一定の効果があったと判断できる。また、このプログラムでは各個人の主体的な活動を促したことにより、海外に対する意識の改善や自己肯定感の向上にも寄与したのではないかと考えられる。

本校の WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業の拠点校<sup>1)</sup>の取り組みでは、高校生活3年間の一貫した構想であり、各学年がこの構想に従い学校全体で実施する計画である。そのため、本プログラムを WWL 構想の一部として実施することは難しいと考えられる。しかし、本プログラムが本校が設定した SGH の改善目標や生徒のグローバル社会に対するより深い見識の広がり期待できることを考慮すると、本プログラムのような異学年協働活動や生徒個人の主体的活動による校外学習を実施することは、本校の WWL 構想の補助的な役割を果たすことができると期待できる。

#### 【参考・引用文献】

- 1) ワールド・ワイド・ラーニングコンソーシアム構築支援事業 構想計画書  
[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/icsFiles/afieldfile/2019/07/22/1419162\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/icsFiles/afieldfile/2019/07/22/1419162_01.pdf)
- 2) SGH 最終報告書  
[http://www.sakado-s.tsukuba.ac.jp/test201907/wp-content/themes/sakado/pdf/SGH\\_Report\\_H31\\_3.pdf](http://www.sakado-s.tsukuba.ac.jp/test201907/wp-content/themes/sakado/pdf/SGH_Report_H31_3.pdf)